情報局編輯 十一月十五日・第三四七號

寫眞週報

一機命中に　神州を護持す

あ、神風特別攻撃隊

忠烈萬世に燦たり

必死爆撃行に出撃の日の神風第一次特別攻撃機隊敷島隊長關大尉の直前『俺たちは爆撃隊員ではなく爆弾だ。いゝか、俺に續くのだ』と隊大尉は隊員を激勵したといふ
——十月二十五日　比島〇〇基地にて——
撮影　小野田報道班員

断じて遺憾に続かん 烈

神風特別攻撃機隊

豊島の大和心もかぐはしい神風特別攻撃機隊員勇行男海軍大尉以下の萬世に嫩たる忠烈、その忠烈に我ら一億奔しく胸打たれ、瞳をのみ、頭を垂れたのは、去る十月二十八日十五時、大本營から豊田聯合艦隊司令長官の全軍に對する布告を發表された刹那であつた

起えて三十一日十六時三十分、大本營は二十五日の豊島隊員の戰果をはじめとして、三十日に至るまでの神風特別攻撃機隊員の、嚴虐なる戰果を發表した

神風特別攻撃機隊の若武者、必死必中の戰果は

撃沈　航空母艦　三隻
　　巡洋艦　一隻
　　輸送船　一隻
撃破　航空母艦　六隻、戰艦　二隻、
　　巡洋艦　二隻、輸送船　一隻、
　　艦種不詳　三隻

合せて十九隻であつた

皇國に仇なす敵艦船が太平洋に迷ひ限り、撃ち撃ちてやまざる神風特別攻撃機隊よ、花なら散りを　大君の御楯と恬しみなく散ずる若武者よ

純一無雜

我らは、その表に「日本人のまごころ」を見る。神代ながらの「本然の日本人」を知る

「生も死も神のまにまに大君の
　御楯となりて仕へまつらむ」

の日本人の顯現を、目のあたりにするのである

もとより日本人ならば、一度、皇國の大事に際しては、かへりみることなく大君の邊にこそ死なむ志を持たぬものとてあるまい。さること、永遠く絶へず、傳へ來つた民族の忠誠心の足らざるなきやを憂ふるのである

神風特別攻撃機隊の若武者は、平素の訓練にあつて必死を目指してゐた。その希ふところは、我が身を必中の爆彈、魚雷として一機よく一艦を屠り去り、皇國千万年の運命を開ぐにあつた

長くも

上御一人、萬歳に宣らせ給うての、我ら臣下である。扶翼に死してこそ日本人なのである。そのためには、生死の如きは論外、萬分するところは唯一つなのである

この心事においては、今日まで幾度かの國難に身を挺した數々の「決死隊」諸勇士のそれと連綿不斷、血の繋りを有する。いはゞ神風特別攻撃機隊は、五くは日清戰爭に魚雷を抱いて威海衛海内に突入した水雷艇隊、日露戰爭の旅順閉塞隊、さては今次大東亞戰爭における特別攻撃隊の諸勇士によつて相傳へ、相承け來つた帝國海軍の傳統、神武御東征以來の大御軍の精神が、靜然、凛り溢つた精華なのである

神風特別攻撃機隊員の若武者の心事を訊ねて、我らの胸に強く迫るものは、その自らの戰果を確認できない戰果即戰死といふ事實である。嘗ての「決死隊」諸勇士には、自らの戰果を確認できる機会なしとしなかつただが、神風特別攻撃機隊員の若武者にはその機会は絶對にない

しかも若武者は欣然と征いてやまぬ

思うてこゝに至れば、我らは、たゞ、襟を正して、端然、瞑目するのみ

想うてもみよ、進發の命令は「死」を宣することである。進發することは既に「死」である。命ずるものも、心中無言の裡に、時とところとこそは異なれ、共に死するを誓ひ、命ぜらるゝものも、耳には聞かされ、その魂の誓ひを知るのでなければ、到底、冷靜平然たり得よう道理はない

更に、神風特別攻撃機隊員若武者の進發を見送る地上勤務員は、その天翔け去る後姿を地に伏して拝み、司令は杖拳杖に身を托して見送り、副長はこけつ、まろびつ、遙かなる雲間に沒しゆく英姿を涙しなく追ひかけたといふ

この心事、胸の裡は、「自分達も必ず續くぞ」の無言の誓ひでなくて何であらうぞ。若武者を生ける神々と崇める心もさりながら

このやうな神風特別攻撃機隊員の若武者を中心とする數々は、唯一つ、「大御軍人」の精神の上に打ち立てられる。それは、死するも皇國を護り抜く國體護持のためには敢へて悠久の大義に生くる日本人のまごころに根ざすものである

いひかへれば、神風特別攻撃機隊は「日本人のまごころ」に咲いた魂の花のである。その魂なき花を美しく咲かせ、優花と散らすまい、その心遣りが神風特別攻撃機隊をめぐる數々なのである

「日本人のまごころ」――皇國あるを知つて我あるを知らず、皇國の大事には我が一切を捧げ盡す忠誠心、これは神代ながらの日本人の本心であり、この心を當時もつことが、日本人本來の姿である

「日本人のまごころ」は皇國の歴史と共に傳へられ傳はるもので、現に我らの五體に脈々と流れてやまぬ血潮の中に存在してゐる。日本の美しい山河とも結晶してゐる。藤田東湖は、これを「天地正大氣」と謳ひ、軍神廣瀬中佐は「誠字」と觀つた

いま、皇國眼前の大事に「日本人のまごころ」の花、神ながらのかぐはしい花は、咲き咲いて續よようともしない

我らはこの頽なくかぐはしい花を、美しく悠久と續伸するのみであつてはならない。我らもまた我らの「日本人のまごころ」を、その本然の姿で現はすことに努力せねばならぬ。そしてこの「續ない花」を立派に宣に結ばせるのだ

「日本人のまごころ」で驕敵を撃摧しよう

そして神風特別攻撃機隊に續くのだ

一億、足並を揃へて續くのだ

大本營海軍報道部

神風特別攻撃機隊第一回出撃

日	場所	戰果 撃沈	撃破
25日	スルアン東方洋上及びにスリガオ東方洋上	空母(中)一 巡洋艦一	空母(中)二
26日	スリガオ東方	空母(大)二	空母(大)一
27日	レイテ灣	輸送船一	巡洋艦一 輸送船一 艦種不詳一
29日	ラモン灣東方洋上		空母(大)一 巡洋艦(大)一 艦種不詳一
30日	スルアン東方洋上	空母(八)一	空母(中小)二 艦種不詳一
総合戰果		空母 三 輸送船 一 巡洋艦 一 艦種不詳 一	空母 六 巡洋艦 二 輸送船 一 艦種不詳 一

大黒海軍上等飛行兵

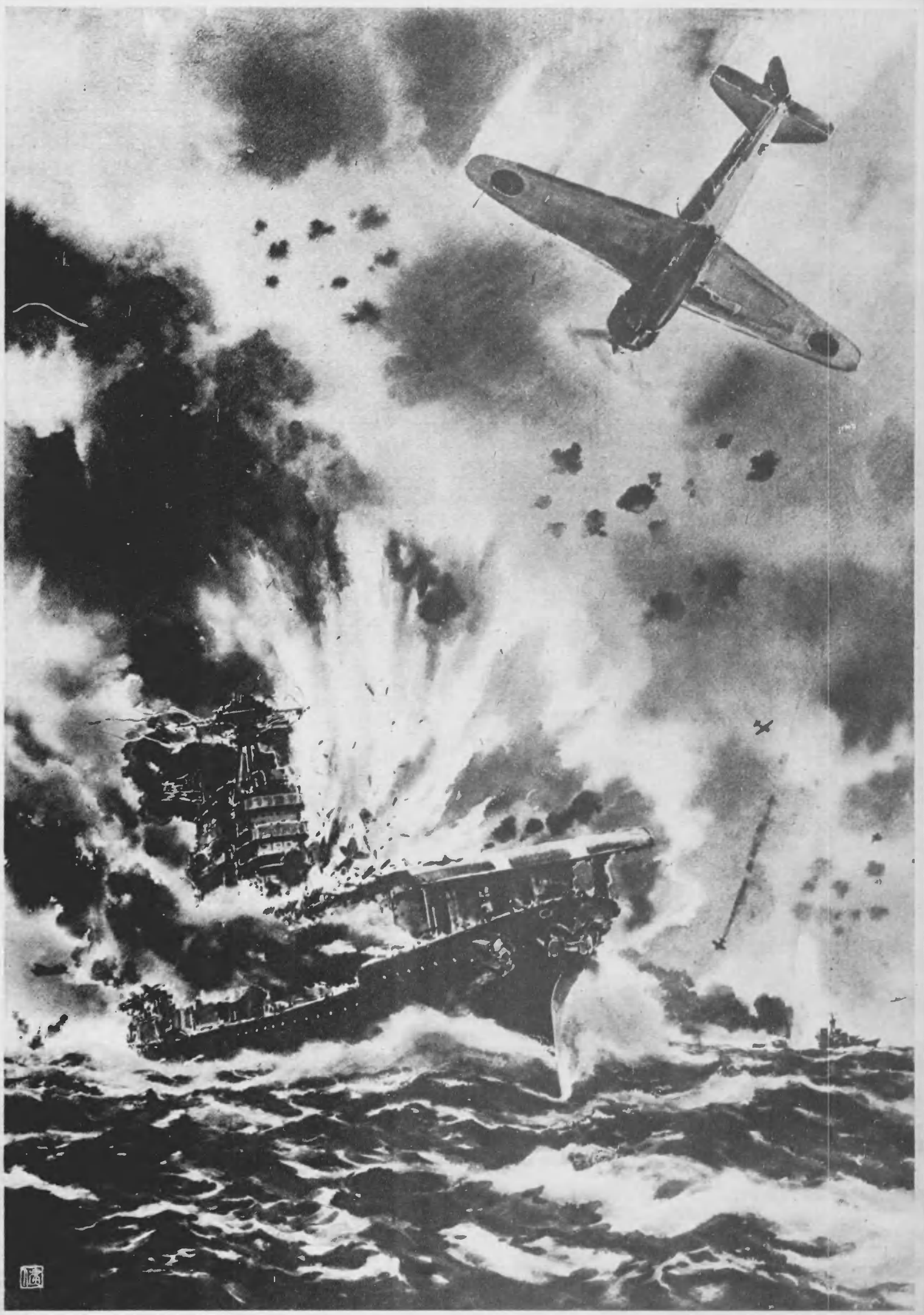
永峰海軍飛行兵長

谷海軍一等飛行兵曹

中野海軍一等飛行兵曹

豊島隊出撃！出撃直前に、被害状をつきつゝ、隊員の手を一人づつしつかと握つて勵ます司令一抱くは副長

比島〇〇基地十月二十五日　小野田海軍報道班員撮影



神風特別攻撃機隊想像圖

しつまてい精に機敵たし中命に母空敵
機撃攻別特たし發爆ろいかひ襲にらぐ

畫 健 澤 松

われらは鶴嘴で敵艦を屠る

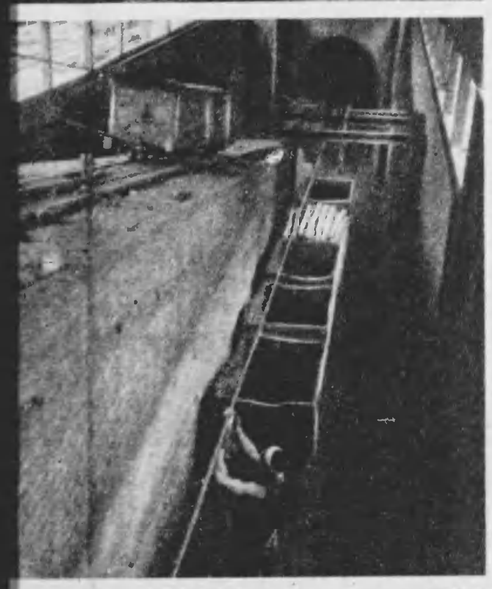
十月一日より十二月三十一日まで——決戦必勝石炭増産運動

石炭がなければ戦争はできない。海を圧する飛行機の編隊も、輸送船団も、空を覆ふ戦車群も、敵艦を粉砕する爆弾も石炭がなくては造れない。さらに食糧増産に必要な肥料も、アスピリンなどの醫藥も、富所のガスも石炭が生みの親であつて、正に石炭こそは現代戰の父であり、國民生活の母である

こゝに石炭産業が早くから五大重點産業の一つに指定された所以がある。しかし、決戰下の今日では、海上輸送力は作戰地域への兵員、兵器、補給物資などの輸送に當てられるから、これまでのやうに滿洲、北支から移輸入される石炭は減少するものと思はねばならない。しかも需要は飛躍的に増えてゐる。もちろん亞炭などの代用燃料を使ふとか、熱管理によつて石炭を節約するとか、その對策はさまざまあるが、内地石炭の大増産が一番手近かで、最上な方策である

このために去る十月一日から決戰必勝石炭増産運動が全國の炭礦にくりひろげられてゐるが、中でも内地石炭の大半を産するだけに九州の炭礦の意氣込は物凄く、こゝ福岡縣三井田川鉱山では、全山こぞつて増産へ夜も寢もない闘魂したばかりの勇士たちが、血氣盛、突撃隊を組織し、隨時隨所に出動して鑛へ上げた熱烈の腕を揮へば、北海道の炭礦から轉進して來た炭礦戰士がこれに相呼應して増炭の陣頭に立つ。さらに決戰増産に應へて、工場からこゝに配置された轉換勞務者も、勤勞調練所で受けた錬成もそのまゝに自信たつぷり働き抜けば、朝鮮の勞務者はわれもみ民なりの自覺にふるひ立ち、このほか勤勞動員の田川東高女生は選炭、檢炭に、田川工業生は坑木運びに、或ひは天理教の年老いた信徒など、汗にまみれ、土にまみれて敢闘してをり、これこそ國を擧げての増炭の心强い結晶である

豪州沖、フィリピン沖航空戰の大戰果に全山は追撃増炭に移り、その日、増産確定量を遙かに突破する戰果をあげたといふ。「われらは鶴嘴で敵艦を屠るぞ」と力闘をつゞける炭礦戰士には、神風特別攻撃機隊に應へる生産者の『まごころ』がこもつてゐる



炭塵も貫くぞと鑿岩機を打込む炭礦戰士は増産に體當りだ

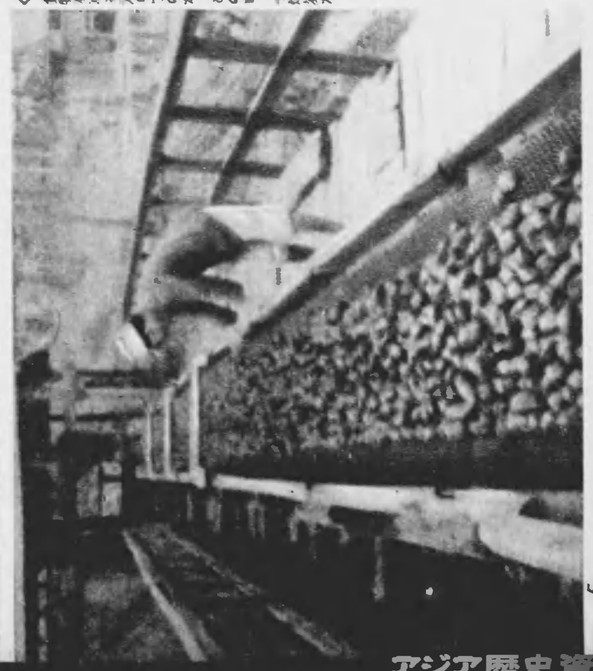
荒鷲の曉の進發を偲ばす氣合が、坑内へ縦込む全戰士の額に滲つてゐる

勤勞戰士の血と汗のにじむ戰果が山と積まれて、一車また一車と送り出されて來る

坑内の男性——まは天理教信徒による採炭報國隊「いざ・ひのきしん隊」である。七月中旬から今までに男女信徒一万名を全國の炭礦に動員したが、奉仕期を終つてもなほ炭礦で健闘してゐる組もしばしば、檢員の數倍にも當る人坑、汗被をものともせず信仰の先頭に立つて孤塁をまもつた——福岡縣宮浦炭坑——

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

⇧「おしらかて、ひつそしてられまくん」太十セの老らの舎や米原教に鼻はつんな米三郎市さんは、「重い坑木運びにち元気一杯



⇩採炭のナルガ石炭をトロへ積込む女子供後の手頃きは板についてて、実早く

⇩工場から炭鉱に配給された感度と、工員電主は防炭の山をみるく一瞬して

⇩貨物列車がルキ足らナのが、このヒントで採炭が計画通りにゆかねば、あらゆる物産がびたつと止まる。その大切な

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

⇦ベルガスフィリピン大使の挨拶

⇧臨席のボース自由インド假政府首班（左端）と締盟各國大使―王端洲國大使、スターマードイツ大使、蔡中華民國大使、テー・モンピルマ大使、ウィチットタイ國大使、ベルガスフィリピン大使、プリンチピーニイタリア代理大使（左から）

大東亞共同宣言一周年

昨年の十一月六日、東京で開かれた大東亞會議の席上、大東亞各國の代表が、大東亞の歴史に劃期的な大東亞宣言を採擇してから一年餘。この間、帝國を始め大東亞各民族は大東亞宣言の具現を目指して、着實な建設を進めてきた。本年九月七日第八十五帝國議會では、新らたに東印度民族の獨立が約束された。次いで同月二十三日フイリピンが米英撃滅の戰列に參加してゐる

しかも、フイリピンの參戰によつても分るやうに、聖戰の歩武、大東亞建設の進捗に焦燥を感ずる敵は、今ぞその總力をあげて反攻並びに大東亞再侵略の野望に出で、戰ひは文字通り決戰、大東亞各民族の全力を結集して敵の非望を撃つべき、また撃たねばならぬ秋はきた

帝國政府は十一月六日、大東亞宣言一周年の日に政府聲明を中外に發し重ねて大東亞宣言の趣旨と精神を明かにすると共に、最近の戰果をますます擴大して最後の勝利を獲得する強固な決意を有することを披瀝した。各國首席もまたそれぞれの機會を通じて、あくまで帝國に協力し敵米英を撃滅して大東亞宣言の大理想實現に邁進すべき旨を明かにした

なほこの日帝都の日比谷公會堂では、來朝中のボース自由インド假政府首班及び締盟各國大公使を迎へて午後一時から興亞總本部主催の「大東亞共同宣言一周年記念國民大會」が開かれた。一年前、新らしい大東亞史の基礎が固められた聖なる日を記念する國民大會は、折柄設令されてゐた警報が解除された直後にも拘はらず堂々開會され、敵撃滅の憤激新らたに大東亞民族の先頭に立つて隣邦大東亞宣言の實現を誓ふ國民の決意を殘りなく示した

⇦重光大東亞大臣の挨拶

興亞總本部近藤南方局長の大東亞共同宣言の朗讀―右は橋本欣五郎大將

⇧臨席の小磯內閣總理大臣、興亞總本部統理秋井大將、重光大東亞大臣、杉山陸軍大臣、島田軍令部總長、小林軍政會議議長（右から）

東京　日比谷公會堂
十一月六日

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

新しい国家建設に協力を

新憲法と物資交換市場

国民の皆さん！

日本は、今、新しい国家建設の途上にあります。

日本の国家建設は、日本国民の皆さんの協力なくしては、絶対に成功しません。

皆さんの協力とは、どんなことでしょうか。

それは、皆さんが、日本の新しい憲法を理解し、これを守ることです。

新しい憲法は、日本国民の皆さんが、自由に、平和に、幸福に暮すことを保障しています。

しかし、この保障は、皆さんが、この憲法を理解し、これを守ることによって、はじめて実現されるのです。

憲法は、皆さんの生活の基本法です。

皆さんは、この基本法を、よく理解しなければなりません。

憲法は、皆さんの生活の基本法ですから、皆さんは、この基本法を守らなければなりません。

憲法を理解し、これを守ることは、皆さんの義務です。

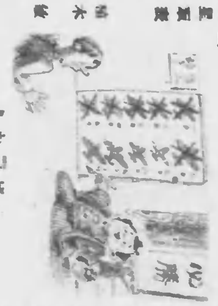
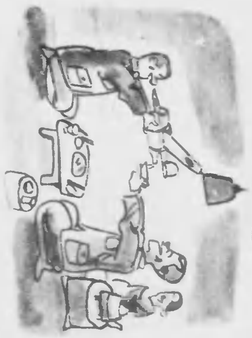
皆さんは、この義務を、果さなければなりません。

憲法を理解し、これを守ることは、皆さんの義務であると同時に、皆さんの権利でもあります。

皆さんは、この権利を、行使し

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

写真週報
（海軍報道部）
定価一部十錢
毎月曜日発行
編輯兼発行者　朝日新聞社
印刷者　同
印刷所　朝日新聞社
中外印刷株式會社
発行所　朝日新聞社

写真で見る海軍の生活

走り使ひ